

芦津実全と『真正哲学殺活自在論』

藤田和敏

はじめに

本稿は、明治一〇年代から同二〇年代にかけて天台宗務庁職員を務めた芦津実全の活動について、著書である『真正哲学殺活自在論』などを素材に思想面から考察することを目的とする。

明治初期の天台宗は、慶応四年（一八六八）三月一七日に新政府が実施した神仏分離令の発令などにより大打撃を蒙った。拙著で明らかにしたように、近世の天台宗は諸国の東照宮や大社、中世の莊園鎮守を前身とする郷鎮守などの神宮寺を末寺化して幅広く教線を伸ばしていたが、神仏分離令によって神宮寺の破却と社僧の還俗が推し進められた結果、教団組織の大幅な縮小を余儀なくされた。また、江戸幕府の崩壊に伴い、輪王寺宮と寛永寺執当を核とする近世的な教団の権力構造が解体されたために、中世の天台宗を統轄した青蓮院・妙法院・梶井の三門跡で構成される三御門室が延暦寺を拠点に教団組織の再編成を試みるが、新政府による明治四年（一八七一）五月の門跡廃止命令と、同五年（一八七二）四月二五日の教導職制度開始によって、延暦寺衆徒などが教導職管長を務める新たな教団の体制が成立したのである。^①

明治期の天台宗にとって傷ついた教団組織の拡充は最大の課題とされたのであるが、本論で述べるように、芦津実全は天台宗の僧侶として得度した後、宗務庁職員に就任して教団の布教活動を取り仕切ることでその問題に立ち向

かった人物である。芦津についての先行研究は、キリスト教徒の批判に対抗して仏教の真理性を訴えた『明教新誌』紙上の論説「寂滅弁」を分析した星野靖二と、信教の自由など近代憲法の原理原則についての態度を『憲法正眼東洋新仏法』から検討した頼松瑞生の論考を挙げることができ、星野は仏教徒とキリスト教徒との論争、頼松は当該期における知識人の憲法認識という視点から芦津の思想を取り上げており、宗務庁職員としての社会的立場を踏まえた検討は行われていない。本稿では、芦津の当該期における思想形成について天台宗教団組織の展開を踏まえながら分析する。

また、芦津は臨済宗相国寺派初代管長である荻野独園に参禅しており、禅思想についての造詣も深かった。彼の論説は天台教学と禅思想との関連の中で著述されているので、両者の関係性を腑分けしながら考察したい。

一 明治一〇年代の芦津実全と「摩訶止観現益論」

1 芦津実全の経歴

まず、青年期までの芦津実全の経歴について、昭和一二年（一九三七）に相国寺塔頭長得院住職小島文鼎が編集した臨済宗僧侶の伝記集である『続禅林僧宝伝』⁽³⁾からまとめておく。

芦津は、嘉永三年（一八五〇）に紀伊国和歌山で生まれた。父親の幸策は和歌山藩の士分であったが、芦津は若くして出家を志し、文久三年（一八六三）に天台宗の僧侶として得度している。

明治八年（一八七五）に芦津は上京し、麻布天真寺で臨済宗相国寺派初代管長荻野独園に相見した。荻野は、当該期の臨済宗を代表する僧侶である。明治三年（一八七〇）に相国寺住職となり、同五年の教導職制度開始とともに上京して大教院院長と曹洞宗・臨済宗・黄檗宗の三宗が合同して結成された「禅宗」管長に就任、神道国教化政策に対

抗して新政府に宗教活動の自由を訴えた。⁴⁾ 芦津が荻野との関係を結んだ理由は不詳であるが、相見後に芦津は荻野に師事し、天台宗の僧籍を持ったまま明治一〇年（一八七七）冬に相国僧堂で荻野に参禪する。この年以降は毎年参禪し、「蘊奥を究尽」したとされている。明治二八年（一八九五）に荻野が死去した後に、相国寺派二代目管長中原東岳から印可を受けた。

芦津は、明治一五年（一八八二）に東京で結成された明道協会に参加している。池田英俊の研究によれば、明道協会とは長州藩出身の陸軍軍人である鳥尾得庵の発起による在俗仏教者を中心とする仏教結社であり、従来の一宗一派を越えた四恩十善を基調とする通仏教主義を主張して幅広い支持を受けた。池田は、明道協会のような仏教教会・結社が、明治八年の教部省による「信教自由の口達」を契機に同一〇年代後半には全国各地で結成されたこと、各宗派協同の組織の中で新しい人間関係が発展する機会になったことを指摘している。⁵⁾

明道協会は、仏教各宗派の僧侶も「福田衆」として加盟を認めており、その中で優れた僧侶を導師として拝請した。荻野独園は明治一七年（一八八四）三月に導師として招かれて『碧巖録』の提唱を行っている。⁷⁾ 同月に作成された明道協会本部役員の一覧によれば、芦津には福田衆幹事という役職が与えられた。⁸⁾ また、庶務幹事には当時の仏教界唯一の新聞『明教新誌』の主宰者であった啓蒙思想家大内青巒が就任しており、『明教新誌』には明道協会の規則や活動報告などの記事が多数掲載されている。

2 「摩訶止観現益論」の内容

芦津は、表1に示したように、明治一四年（一八八一）から同一一六年（一八八三）にかけて『明教新誌』誌上に一四本の論説を寄稿している。明道協会の活動を通じて大内に親近したことが寄稿の契機になったと思われる。本節では、最も分量の多い論説であるNo.6「摩訶止観現益論」から、当該期における芦津の思想について検討する。

「摩訶止観現益論」は、『明教新誌』一二九七号から一四三四号にかけて一九回に分割して掲載されており、表2のように序文と第一篇〜第六篇に分かれている。序文には執筆の経緯が次のように示されている。

(史料1)

予、昨年四月弘教書院に入て諸大徳の末班に陪し、容易に縁山秘蔵の三大蔵を校讐するの勝縁に値遇したるは実に幸甚歎喜に堪へざるなり、而して曩日我が宗祖智者大師所説の摩訶止観を閲読するを得たり、予、往年難治の病症に罹り、薬餌口に入らず、殆とん死地(ママ)に陥らんとせしが、頼ひに本書の庇蔭に由りて治術を解し、頼りに内観を試みて蘇生することを得たるは全く斯文の現益なり、(中略)予は唯本書に就て其最とも利益の著しるしき処を摘示し、篇を重ね章を逐て、本誌に登録せんと欲するのみ

表1 明治14年から同16年までの『明教新誌』上の芦津の論説

No.	論題	掲載号
1	寂滅弁(第1篇〜第2篇)	1219~1221、1347~1350、1352、1353
2	読西山夜話有感	1224~1225
3	報恩説	1234~1241
4	再読西山夜話	1249~1250
5	明治十四年除夕説話	1264~1267
6	摩訶止観現益論(第1篇〜第6篇)	1297~1298、1300~1302、1363、1364、1366、1417、1419、1421、1423、1425、1426、1428、1430、1432、1434
7	実相円随沙弥小伝	1362
8	清国仏法の現況を報す	1437~1439、1441、1443、1445、1447
9	聞日本宗教新誌発兌書感	1449、1451
10	蒼谷井宗右衛門氏	1453、1455
11	答美山式氏	1458、1460、1462、1464、1468、1470
12	宗教の盛衰は教師の勤情に在るを論ず	1476、1477
13	縮刷大蔵経竣功の日を俟つ	1490、1491
14	読天台宗教意書感	1500、1502

表2 「摩訶止観現益論」の内容

章立て	掲載号	内容
序	1297	執筆の動機
第1篇	1298、1300~1302	天台止観の概要と歴縁対境止観についての解説
第2篇	1363、1364、1366	五略(発大心・修大行・感大果・裂大綱・帰大処)の要旨と発大心についての解説
第3篇	1417、1419、1421、1423、1425、1426、1428、1430、1432、	修大行についての解説であり、四種三昧を常坐三昧(1417、1419)→常行三昧(1421)→半行半坐三昧(1423)→非行非坐三昧(1425~1432)の順で説明
第4篇	1434	感大果についての解説
第5篇	1434	裂大綱についての解説
第6篇	1434	帰大処についての解説

史料1の冒頭に見られる弘教書院とは、浄土宗の福田行誠ら設立した日本で最初の金属活字を使用した漢訳大藏経『大日本校訂大藏経』の版元である。⁽⁹⁾ 弘教書院では、増上寺所蔵の大藏経を底本として明治一三年（一八八〇）から『大日本校訂大藏経』の校合作業を開始したが、福田が『明教新誌』に寄稿した⁽¹⁰⁾「弘教書院大藏校讐諸大徳の欠員を増補せんことを勧請する牒」と題する論説で、「大藏数千巻の校正其挙容易にあらず、思ふに五十余員の校者を得て勉強の力を加ふるに非ざれば、兼て期約の歳月を以て成満することを難からん、（中略）方今漸く校者二十余人を得たれども、未だ所念の半に至らず」と述べているように、担当者の不足から作業は困難を極めた。⁽¹¹⁾ そのため、弘教書院は明治一四年三月末に仏教各宗派に呼びかけ、管長の責任で人選された校合者を集めて新たに校讐場を開設することになった。⁽¹²⁾ 芦津は天台宗から選出され、増上寺経蔵の天台関係典籍を閲覧する機会を得たのである。史料1では、芦津は長年難治の病気に罹っていたが、校合作業の中で閲読した『摩訶止観』に基づき内観法を実践して病気を治したこと、そのような『摩訶止観』の利益が著しい点を論説の中で紹介したいことが述べられている。

「摩訶止観現益論」での芦津の執筆姿勢は、第三篇の冒頭に「予、今此方法（四種三昧の行儀方法＝筆者註）に就て止観の全文を載録して以て自他修道の一助に供せんと欲す、諸君も亦只意の在る処を領会して、文の長冗なるを尤むるなくんは幸甚」と述べられていることからうかがえるように、基本的に『摩訶止観』の祖述を心がけるものであった。「摩訶止観現益論」と『摩訶止観』の内容を比較すると、第二篇は『摩訶止観』巻之一、第三篇～第六篇は『摩訶止観』巻之二の文章を引用している箇所が多くを占めている。⁽¹⁴⁾

しかし、「摩訶止観現益論」に芦津自身の主張が見られなかった訳ではない。第一篇において芦津は、「大師は^(種脱)四三昧の中に於て殊に非行非坐三昧（亦た随自意三昧と云ふ）を詳かに説きたまへり」、すなわち天台智顛が四種三昧のうちで非行非坐三昧を重視していたと論じ、続いて『天台小止観』第六章の歴縁対境止観部分を要約して掲載している⁽¹⁵⁾のである。確かに『摩訶止観』巻之二における非行非坐三昧の説明は長文にわたるが、『摩訶止観』全体を見た

場合に歴縁対境止観が坐禅止観よりも詳細に説かれているとは言いがたいのであり、芦津は非行非坐三昧を重視する独自の見解を持っていたと評価できる。

そのような芦津の視点は、第一篇で近世中期の臨済僧白隠慧鶴の言葉である「動中の工夫は静中の工夫に勝ること百千億倍なり」を引用していることから、日常生活における動中の工夫に比重を置く白隠禅の影響を受けていたことがうかがえる。周知のように、白隠は「隻手音声」の公案を新たに創出するなど、臨済宗僧堂における指導法を体系化・効率化した僧侶であり、芦津の師である荻野独園を始めとして、明治以降の臨済宗僧堂の師家はすべて白隠の法を受け継いでいた。¹⁶⁾

白隠は、寛延二年（一七四九）に肥前蓮池藩主鍋島直恒に差し出した書状を編集する形式の仮名法語『遠羅天釜』を刊行しているが、その巻之上には「一切処ニ於イテ受用スル底ノ氣力ヲ得ントナラバ、動中ノ工夫ニ越ヘタル事ハ侍ルベカラズ」と記されている。¹⁷⁾『遠羅天釜』巻之上は、武士が多様な日常業務の中で如何にして修行し見性するかを説く内容であることから、右のように動中の工夫の重要性が論じられたのであり、「静中ノ人ハ必ず動中ニハ入ル事ヲ得ズ、偶動境塵務ノ中ニ入ル時ハ、平生ノ会所得力ハ、迹ト形モナク打失シ、（中略）卑興ノ働キモ間々多キ者ニ侍リ」と、坐禅のみの修行は日常生活では役に立たないことが強調されたのである。¹⁸⁾

先述したように、芦津は明治一〇年から荻野に師事して相国僧堂に通参している。坐禅の実践に取り組む中で逢着した様々な疑問を解決する上で、『大日本校訂大藏経』校訂作業において初心者・初学者に基準を置いて説いている『摩訶止観』を閲読する機会を得たのは裨益する点が多かったのではないだろうか。そのような経験が「摩訶止観現益論」での『摩訶止観』を祖述する姿勢に繋がったものと考えられる。しかし、芦津の『摩訶止観』解釈には白隠禅から示唆を受けている部分も見受けられた。

次章では、右のような芦津の思想が、明治二〇年代にいかなる展開を遂げたかについて検討する。

二 明治二〇年代の芦津実全と『真正哲学殺活自在論』

1 天台宗務庁職員としての芦津実全

天台宗は、明治一〇年代の半ばから後半にかけて近代的な教団運営を行う組織基盤を形成している。本節では、宗務庁職員である芦津がその過程において果たした役割について論じておきたい。

明治一三年（一八八〇）に、天台宗初めての議会である「大会議」が開催されている。同年四月二〇日に天台宗管長大杉覚宝名で出された「大会議告文」によれば、①「学林を扶起して教行を翼張する事」、②「宗務を改理して本末を維持する事」という二つの綱目について議論することが謳われた。⁽¹⁹⁾ 大会議は六月一〇日に開会し、二八日に閉会している。⁽²⁰⁾ 八月には、明治八年の神仏合同大教院廃止以来の天台宗における宗務機関であった天台宗大教院が、天台宗務庁に改称されている。⁽²¹⁾

明治一〇年代には、延暦寺の伽藍は荒廃が進んでいた。明治一二年（一八七九）四月に明治天皇の命令を受けて比叡山を巡覧した大藏卿大隈重信は、太政大臣三条実美に提出した陳述書の中で、「堂宇ハ頽廢シ、山院ハ荒廢シ、其甚シキ戒壇院ノ如キ棟架腐朽、雨潦室ニ滿ツ」と述べている。⁽²²⁾ そのような状況を受けて、明治一四年に天台宗は伽藍復興の勧進を目的とする崇叡会を久邇宮朝彦親王を会長として発足させている。⁽²³⁾ 明治一七年に作成された「崇叡会規則」では、第四条で「資金の員額は五十万円を目途とし、明治十五年九月より明治二十年八月まで満五ヶ年間に之を勧進募集するものとす」、第五条で「本会は右期限の間、官の許可を得て四方に勧進委員を派出し、又は府県に府県勧進委員を置き、以て信徒の喜捨布施を催かすべし」とされており、⁽²⁴⁾ 勧進目標を五〇万円に設定し、全国に勧進委員を派遣して喜捨を募ることなどが規定された。

明治一八年（一八八五）には「天台宗宗制寺法」が制定されている。⁽²⁵⁾これは、前年八月一日に発令された太政官布達第一九号第四条において、「管長ハ各其立教開宗ノ主義ニ由テ左項ノ条規ヲ定メ、内務卿ノ認可ヲ得可シ、（中略）一宗制、一寺法」、⁽²⁶⁾仏教各宗派管長は宗制寺法を定めて内務卿の認可を得なければならぬと定められたことに伴うものである。「天台宗宗制寺法」では、大学林の総則や試験法、寺格や住職の任免などが詳細に定義されており、宗派自治の基礎が確立された。

芦津は、明治一八年七月に明道協会の職を辞して大内青巒の助手となり、『明教新誌』の編集業務に携わっている。⁽²⁷⁾さらに明治一九年（一八八六）以降は、西日本を中心に天台宗の末寺を巡廻して布教活動を行った。例示すれば、同年四月からは山陽山陰地方を巡教しており、⁽²⁸⁾五月二八日の松江での布教では「聴衆四千余名にて堂上堂下立錫の地も無きに至る」と多くの聴衆を集めている。⁽²⁹⁾明道協会や『明教新誌』での活動経験は、芦津の布教者としての能力を大きく向上させたのである。

天台宗務庁はこのような芦津の実力を認め、明治一九年九月一七日に総本山布教課勤務を命じた。翌日には久邇宮親王に謁見し、崇叡会全国布教総理に任命されている。⁽³⁰⁾芦津は天台宗における布教勸進活動の中樞を担うことになったのである。

2 『真正哲学殺活自在論』の内容

(1) 各編の概要

当該期における芦津の名著と位置づけられる『真正哲学殺活自在論』は、明治二三年（一八九〇）に教学書院より発行された。販売の取扱所は天台宗務庁文書課である。荻野独園が序文を寄稿していること、『殺活自在論』という書名、自序において「随処為主、立処皆真」など『臨濟録』からの引用が見られることに象徴されるように、臨濟禪

の立場からの叙述が目立つ書籍である。

表3に『真正哲学殺活自在論』の章立てを示した。全体は五編に分かれているが、第二編が「理致」、第三編が「事」、第四編が「理事無碍」、第五編が「事々無碍」とされていることから明らかなように、編名は華嚴教学の四法界に依拠して付けられている。

各編の概要について述べておきたい。第一編は編名が付けられていないが、第一章「寂滅」で寂滅＝悟りが「虚無の空理」ではなく「即今ぴち／＼と、生きて居る」ものであること、第二章「人權」で古代インドの階級制度を釈迦が否定したと主張されていることから、近代社会における仏教の有用性を論じたものと評価できる。

第二編「理致」では、大乘仏教の教理と修行についての理論的枠組みが示された。具体的には、第八章「真如縁起」の冒頭で「一法とは、則ち真如にして、万象は、皆其の影なり、而して色と心と、互に照発す」、すなわち、一切の事物は空であることが真理であり、心の認識作用によって事物は顕在化するとともに、事物が認識作用を促すことでは心は心として成り立つという真如縁起説が論じられており、第五章「進修」で、修行を「教乘より入る者」が行う四種三昧と「禪門より入る者」が実践する坐禪に分類し、以下第二章「悟後の消息」まで坐禪修行の過程について説明されている。

第三編「事」は、明治仏教界についての芦津の現状認識が主たる内容である。第二章「各宗派の起源及び略史」、第二章「本尊弁」で日本における仏教一宗の沿革および各宗本尊を説明するとともに、第二章「仏教の盛衰興廢」で仏教東漸の歴史について論じている。第三章「法務及び教務」から第三章「公認教」までは明治期における仏教教団組織と国家と宗教の関係についての解説になっている。

また、第三編では、近代社会で仏教を如何に位置づけるかという第一編と同様の問題意識に基づいた以下の三つの論点が提示されている。

表3 『真正哲学殺活自在論』の内容

編名		章名		頁	
第1編		釈教の本領	第1章 寂滅	1～7	
			第2章 人権	7～13	
			第3章 義務	13～17	
第2編	理致	本光	第4章 心の実体	17～25	
			第5章 智慧	25～27	
			第6章 慈悲	27～29	
			第7章 勇気	29～33	
			現象	第8章 真如縁起	33～35
				第9章 仏の実体	35～45
				第10章 神の実体	45～54
	第11章 物の実体	54～59			
	第12章 仏界	59～60			
	第13章 魔界	60～61			
	第14章 殺活自在	61～66			
	正修	第15章 進修	66～71		
		第16章 退歩	71～72		
		第17章 現境	72～74		
		第18章 実証	75～86		
		第19章 修証一如	86～89		
		第20章 靈光不昧	89～93		
		第21章 成仏	93～100		
	第3編	事	建立法の旨を弁ず	第22章 悟後の消息	100～100
				第23章 断常二見	100～105
				第24章 性相二学派の起源并に結果	105～107
第25章 各宗派の起源及び略史				108～119	
第26章 本尊弁				119～122	
第27章 仏教の盛衰興廢				122～126	
第28章 莊嚴淨土の説				126～132	
第29章 大小乗の区別				132～136	
第30章 情感・智力				136～140	
第31章 不可思議				140～146	
第32章 信心の理由				146～147	
第33章 仏教と儒教との異を簡む				147～156	
第34章 仏教と基督教との異を簡ふ				156～162	
第35章 法務及び教務				162～164	
第36章 本末の關係	164～165				
第37章 檀信律の關係	166～167				
政治法律的に對する仏教	第38章 国教	167～169			
	第39章 公認教	169～171			
	第40章 社交上に對する仏教の義務	172～172			
	第41章 四恩	173～178			
	第42章 十善	178～180			
	第4編	理事無碍	理論實際併行論	第43章 一心三觀の活作用	180～197
				第44章 無中の一路	197～198
第45章 真俗交徹				198～200	
第46章 調和				200～201	
第47章 博愛				201～203	
第48章 忍辱				203～204	
第49章 道德				205～205	
第50章 仏教者が国家に對する義務				205～207	
第51章 婦人教育				208～210	
第52章 生存競争に就て				210～213	
第53章 英米仏三国の仏教				213～216	
第54章 力遊				216～217	
文学上に對する仏教				第55章 仏教文学の位置	217～220
	第56章 西洋哲学に對する仏教	220～223			
	第57章 仏教八識三身四智の弁	223～233			
	第58章 万象を剖斥し心性を開決するハ楞嚴に在り	233～238			
	第5編	事々無碍	全堤全活を以て社会を利益す	第59章 宗通説通	238～240
第60章 兩刃交鋒				240～244	
第61章 普門示現の利益				244～245	
第62章 将来弘通の大事				245～246	
第63章 究竟涅槃				246～247	

一点目は、第二編で論じられた真如縁起説と坐禅による悟りを芦津は仏教の本質と見ており、第二章「莊嚴浄土の説」で浄土信仰を「己心の実体を捨て、影法師の阿弥陀の袖にすがり附かんとする」というキリスト教と同様の自心の外部に真理を求める信仰として、第九章「大小乗の区別」で小乗仏教を「此身を灰にし此智を滅して真諦に称ふと云ふに至る」という灰身滅智の思想として排撃した点である。

二点目は、西洋哲学全般と仏教の関係について、第三章「不可思議」において「大体釈迦の教ハ微妙不可思議の理を顕ハして、西洋の所謂哲学なるものに超駕せるあり」と論じており、「人智の本源」を究明する西洋哲学よりも人智を超える不可思議を因縁因果の道理から解き明かした仏教の方が人間本具の心性に到達していると評価した点である。

三点目は、儒教・キリスト教との比較から仏教の優位性を述べた点である。キリスト教については、第四章「仏教と基督教との異を簡ふ」で「仏教ハ因縁説にして、耶教は造化説なり」、「神が創造説は到底戯論たるに過ぎず」と述べており、神を絶対者とみている点を論難した。第一〇章「神の実体」でも、「元來基督の豪傑なる所以は、大妄想を起して、宇宙万有の外に神ありと立て、之を心識外に製造したるを以てなり」と真如縁起説に基づいた批判を展開している。これ以外にもキリスト教への対抗意識は本書の様々な箇所において論じられている。

上記三点のような考え方は、国粹主義が勃興した明治二〇年代に仏教の哲学的形成を目指した井上円了の影響を明らかに受けている。池田英俊の研究によれば、井上は主著の一つである『真理金針』で、①キリスト教と仏教の原理を対比した結果、キリスト教神学が哲学・理学の真理と合致しないという理由でキリスト教を破斥する余地があること、②仏教は聖道門と浄土門の両面を有しており、開明という時代に対応するには聖道門の哲学を体系化する必要があることを唱えた。池田が述べるように『真理金針』は『明教新誌』に連載された論説をまとめたものであり、この時期に『明教新誌』の編集に関わっていた芦津は井上の論説を熟読したはずである。

第四編「理事無碍」は、前半部分の副題が「理論實際併行論」とされていることからうかがえるように、第二編・第三編の内容を踏まえて仏教者が実践すべき問題を論じている。第五篇「事々無碍」は、全体の結論として衆生済度を説いている。

(2) 天台・臨済両宗修行比較論

『真正哲学殺活自在論』の最大の論点は、一七頁という紙幅が費やされている第四編第三章「一心三観の活作用」で展開された天台・臨済両宗における修行の比較論である。芦津にとつて、「一心三観の活作用」は「理論實際併行論」の鍵になるものであった。

議論の前提として、第二篇第四章「心の実体」で、両宗における心の実体を認識する方法論として「教家にハ、教観二門とて、道を明らむるの指南あり、教ハ学問にして、観ハ思慮なり、禪宗にハ、初めより教外別伝不立文字とて、教意を外にして、直に心を明らめしむ、即ち見性の端的を理致と名け、次に機関、次に向上と、三段落を分けて了簡す」、すなわち、教相と観心を両輪双翼とする教家（天台宗）の考え方と、理致↓機関↓向上という公案体系に基づいた臨済宗の修行過程が提示されている。

その上で、第四三章では「三観ハ一心の体用にして、三諦円融一三三三なり、空仮ハ劣にして中道ハ勝れたるに非ず、乃ち衆生陰妄の一念に此三諦を具足して、始より缺減なし、然れども日用三観を事上に抜ふて自在に殺活するに非れば、只是れ本地の理即仏にして、何の働きも作さざるなり、今の円頓行者ハ三観体一互具互融の有様を承知しながら、兎角に用ゆる一段に至ては、事々無碍なること能はず」と述べており、一心三観の内容を説明するとともに天台宗僧侶の観心が不充分である点を批判している。それは「法相名相に執着する者ハ、文学を追廻はして離すこと能はず」とされているように、教相に執着する知識偏重の姿勢が原因と評価している。そして、教相と観心を相応させ

る捷徑として、曹洞宗の始祖洞山良价が修行者の禅体験を正中偏・偏中正・正中来・兼中至・兼中到の五段階に分けて偈頌で表現した「洞山五位頌」（表4参照）に依拠することを提言したのである。

平田高士は、「洞山五位頌」について「無体系な禅思想の中にあつてきわめて体系的な施設方便である」とし、臨濟宗においても修行者の看話工夫がある程度熟すると「洞山五位頌」によって自己の体験を整理させると紹介している。また、平田は上記の五段階の経験について、「正」が仏法上の理、「偏」が理に対する事であることを前提に、次のような解説を加えている。すなわち、①正中偏〓一切皆空本来無物と徹見したところから改めて一切現象を見る状態、②偏中正〓順逆の世界に住してそれを壊すことなく、そのまま実は一切皆空である状態、③正中来〓偏正一如より出で来る慈悲行を開示する状態、④兼中至〓前三位をさらに徹底して大機大用を行ずる状態、⑤兼中到〓「正」も「偏」も何物もなく、平凡そのものであり悟りの痕跡すら留めない状態、である。⁽³²⁾

芦津は、「天台ハ初より実相を觀せしめ、一色一香無非中道の理に達せしむるも、空に依て執有の見を破し、仮に依て帶空の心を滅するの觀を用ひざれば、一心三觀の眞性を徹見すること能はざるなり」と述べており、空觀↓仮觀↓中觀と段階を踏まずに三觀を一心に融合することを求める天台止觀の難しさを指摘している。その上で、「洞山五位頌」の五段階を、①正中偏を空觀、②偏中正を仮觀、③正中来を「我が六即に配当すれば當に分証即」、「円教の初住に身を百界に現し八相成道して広く群生を濟度す」、④兼中至を「我が教理に判すれば乃ち円教の二住已下行向地を経て、等覺の位に入る当体」、⑤兼中到を「究竟即にして妙覺の位に當る」と、天台教学における

表4 洞山五位頌

正中偏	三更初夜月明の前、怪しむ莫れ相逢うて相識らず、隱々として猶旧日の妍を懐く
偏中正	失曉の老婆古鏡に逢う、分明觀面別に真無し、争奈でか頭に迷うて還つて影を認めん
正中来	無中に路有り塵埃を隔つ、但だ能く当今の諳に触れず、也た前朝断舌の才に勝れり
兼中至	両刃鋒を交えて避くることを須いず、好手猶お火裏の蓮の如し、宛然自ら衝天の氣有り
兼中到	有無に落ちず誰か敢えて和せん、人々尽く常流を出でんと欲す、折合還つて炭裏に帰して坐す

※平田高士「洞山五位頌」（『講座禅』6、筑摩書房、1968年）から引用

菩薩の階位や六即の各段階などに比定したのである。

しかし、「洞山五位頌」を活用しなければ段階を踏んだ観心ができないとする芦津の主張は、天台教学・天台止観の基本的な考え方に反したものであった。なぜならば、関口真大が明示したように、天台智顛は仏教のあらゆる經典を①三観の円融を示す円教、②一心三観を隔別して空↓仮↓中と次第して説明する別教、③次第して説くために最初の空観に重点を置いた通教、④そもそも諸法が空なることを分析した藏教と分類し、藏教↓通教↓別教↓円教と被接していく教理の構造を説いたのであり、天台宗ではそのような体系性を持つ教相を踏まえた上での観心を重視してきたからである。本書における芦津の天台止観についての説明は、右のような伝統的理解から敢えて逸脱して臨濟禪の有効性を主張したものであったと評価できる。

おわりに

天台止観と達磨禪との比較研究において優れた業績を残した関口真大は、「禪宗は、一尺のものさしの裏を示してこの一尺を見よといい、天台は、その表を示してこの一尺を見よというごとき、それぞれの特長がある、という古人の評言がある」と述べている。⁽³⁴⁾ 不立文字、教外別伝を標榜する達磨禪に対して、天台止観は整然と観心の方法論を論じているとするのが両者の関係性における一般的な評価である。

しかし、明治一〇年代に『摩訶止観』を祖述する論説を書いていた芦津は、明治二〇年代に入ると天台・臨濟両宗の修行比較論において右のような一般的評価を逆転させ、「洞山五位頌」で段階的な修行のあり方を説いている臨濟禪を優位とする思想を展開するに至ったのである。最後に、芦津の思想をこのように変質させた理由について考えてみたい。

「はじめに」でも述べたように、神仏分離令の発令とそれに伴う廃仏毀釈のために、天台宗の組織基盤は大きく傷ついた。崇叡会の発足理由に見られるように延暦寺の伽藍も荒廃していた。そのような状況は、延暦寺における教学・修行の諸活動を萎縮させ、「玄妙を口にし、心を説き性を説くハ則ち得たりと雖ども奈何せん発転の一着を缺く」（『真正哲学教活自在論』第四章）僧侶を生み出すと同時に、地方寺院においても布教活動が停滞する原因となったと考えられる。

芦津は、崇叡会全国布教総理として西日本各地で布教勧進を行った。明治二〇年（一八八七）に岡山地方を巡回したときの記録「循海教報」では、「美作地方は津山を初めとして随分外教は侵入するも、台門の諸師の中には間々布教に怠り、恬として顧みざるは是れ如何なる旨意なるぞや」と、キリスト教が浸透する状況にありながら布教を怠っている天台宗僧侶の実態を嘆く文章を記している。また、同年二月二七日付の天台宗務庁告諭では、「爰に吾宗の如きは諸家に先つて開宗尤も旧しと雖も、中古時運の変遷に由て衰微を極め、本末の事情壅隔するより、或は宗意の安心を誤認し、度生の本分を忘却して、動もすれば昭代の新世界に立て社会に度外視せらるゝの結果を招くに至る」と、天台宗は衰微を極めており、宗意や衆生済度という本分を忘れ去っているので、新時代の社会から取り残されてしまうという危機感が露わに述べられている。⁽³⁶⁾これが当該期における天台宗の実情であった。

芦津は、天台宗の組織拡張に奮闘する過程で教団を取り巻く現実には大きな懸念を抱いた結果、伝統的な天台教学・天台止観の理解に依拠した布教活動に限界を感じたのではないだろうか。芦津の経歴においては、若き日に荻野獨園に相見して以降の参禅経験が重要な位置を示めていたのであり、停滞する天台宗を活性化していくために、臨濟禪の方法論に基づいて天台教学・天台止観の解釈を組み替えていくべきだと考えたことが、彼の思想を転回させる理由になったのである。このような思想の変化には、明道協会の活動に見られたような明治前期における仏教界の通仏教的な動きの中で、宗派を超えた活動を体験したことが大きな影響を与えたと思われる。

その後の芦津は、明治二十六年（一八九三）にシカゴ万国博覧会において開催された万国宗教会議に出席し、同三年（一八九八）に天台宗の僧籍を離脱して臨済宗に移っている。⁽³⁷⁾このような芦津の行動と思想の展開については今後の検討課題としたい。

注

- (1) 拙著『近世の天台宗と延暦寺』（法蔵館、二〇二〇年）。
- (2) 星野靖二「明治十年代におけるある仏基論争の位相―高橋五郎と芦津実全を中心に―」（『宗教学論集』二六、二〇〇七年）、頼松瑞生「芦津実全の憲法論」（『東京電機大学総合文化研究』一七、二〇一九年）。
- (3) 能仁晃道訓注『訓読近世禅林僧宝伝』下（禅文化研究所、二〇〇二年）。
- (4) 註(3) 前掲能仁訓注書。
- (5) 池田英俊『明治仏教教会・結社史の研究』（刀水書房、一九九四年）。
- (6) 「明道協会福田衆規約」（『明教新誌』一六一六号）
 においては、第一条で「仏道各宗僧侶にして本会に加盟するものを福田衆と称す」、第二条で「福田衆の内、道德知識の衆に卓越して人天の模範となるに堪へたる老宿を挙げて本会の導師となすこと」と規定されている。
- (7) 『明教新誌』一六四二号。
- (8) 『明教新誌』一六四四号。
- (9) 京都仏教各宗連合会編『新編大蔵経―成立と変遷―』（法蔵館、二〇二〇年）。『大日本校訂大蔵経』は、明治一四年から同一八年までの四年の歳月をかけて四一九冊が刊行された。
- (10) 『明教新誌』九六八号。
- (11) 『明教新誌』一一二七号、一一二九号。
- (12) 『明教新誌』一一三二号。
- (13) 『明教新誌』一一五五号。天台宗からは、芦津以外に岩本栄中・桜木谷慈薫が選出された。
- (14) 関口真大校注『摩訶止観―禅の思想原理―』上・下（岩波文庫、一九六六年）。
- (15) 関口真大訳註『天台小止観』（岩波文庫、一九七四年）。
- (16) 今枝愛真『増補改訂版禅宗の歴史』（至文堂、一九八六年）、竹貫元勝『日本禅宗史』（大蔵出版、一九八九年）、拙著『近代化する金閣―日本仏教

- 教団史講義―(法蔵館、二〇一八年)。
- (17) 芳澤勝弘訳注『遠羅天釜』(禪文化研究所、二〇〇一年)。
- (18) 註(17)前掲芳澤訳注書。
- (19) 『明教新誌』九七三号。
- (20) 『明教新誌』九九七号、一〇〇一号。
- (21) 『明教新誌』一〇二六号。
- (22) 渋谷慈鑑編『校訂増補天台座主記』(第一書房、一九七三年)。
- (23) 『明教新誌』一四三八号。
- (24) 『明教新誌』一七〇五号。
- (25) 『明教新誌』一九〇九号、一九一〇号、一九二二号、一九二二二号、一九二二三号、一九三〇号。
- (26) 梅田義彦『改訂増補日本宗教制度史』近代篇(東宣出版、一九七一年)。
- (27) 『明教新誌』一八八二号。
- (28) 芦津は、『明教新誌』にこの時の巡教記録である「山陽日誌」・「山陰日誌」を寄稿している(『明教新誌』二〇四四号、二〇四六号、二〇四八号、二〇五〇号、二〇五三三号、二〇五六号、二〇五八号、二〇六〇号)。
- (29) 『明教新誌』二〇五〇号。
- (30) 『明教新誌』二一〇〇号。
- (31) 池田英俊『明治の新仏教運動』(吉川弘文館、一九七六年)。
- (32) 平田高士「洞山五位頌」(鈴木大拙監修・西谷哲治編『講座禪』六、筑摩書房、一九六八年)。
- (33) 関口真大『天台止觀の研究』(岩波書店、一九六九年)。
- (34) 註(14)前掲関口真大校注書。
- (35) 『明教新誌』二二七九号。
- (36) 『明教新誌』二三一二号。
- (37) 註(3)前掲能仁訓注書。